

翻訳

ケインズの雑誌論文を読む(2)

——国家的自給 (National Self-sufficiency)

松川周二

はじめに

第一次大戦以前のケインズは、まさに正統派の経済的国際主義者であり、自由貿易を支持するだけでなく、英国の海外投資についても、それが英国の輸出産業の繁栄を支え、世界の金融センターとしてのロンドンの利益とも調和していると主張していた。しかし大戦後の世界経済の激動のなか、現実主義者のケインズは、次第に自らの見解を変えていく。

1923年、ケインズは保守党政権の保護主義政策は批判したが、同時に過大な対外貸付は英国経済の利益に反すると指摘し、以降、19世紀的な行きすぎた海外投資—輸出産業型ではなく、バランスのとれた国内投資—国内産業型の経済構造を新しい英国経済像として提示し続ける。とりわけ、1925年の旧平価による金本位制復帰後、英国は金本位の維持に不可欠な高金利政策を余儀なくされたために、輸出産業を中心とするポンド高不況は全般的な不況の様相を呈するようになる。

このようななかケインズは、『ロイド・ジョージはそれをなしうるか (1929年)』において、政府による公共的投資の必要性を強く訴え、具体的な提案を行ったが、それは国内貯蓄を海外から国内へ振り向けることによって資本収支を改善させるだけでなく、不況を克服し、さらには多大な社会的利益（それが生み出す公共的サービス）をもたらすからである。しかし30年代に入って世界的な大不況が進行、英国も金本位制の維持が困難になると、ケインズは、緊急かつ一時的な非常手段であると断りながらも、収入関税を提案する。そして英国が1931年9月に金本位制を離脱、ポンド安が進むと直ちにケインズは、収入関税案を撤回する。

しかし現実にはポンド安が続いているにもかかわらず、英国政府は次々と輸入制限策をとり、32年3月に輸入関税法が成立し、恒久的な保護政策への転換がはかれるが、後にこの政策は「英国経済史の未決の謎」といわれることになる。

前言通りにケインズは、収入関税案を撤回したが、既に述べたバランスのとれた経済構造への転換へという長期的なビジョンと自由貿易の現実的な利害得失の判断から、農業・鉄鋼・自動車などの特定分野について、保護主義の必要性を以前から指摘していたことを見逃してはならない。また、この時期ソ連やイタリアそしてドイツなどの国家的な計画経済の実験が、経済的ナショナリズムの高まりのなかで始っていたこと、米国ではスムート＝ホーレー関税 (1931年) の成立によって保護主義の傾向が強まり、英国もブロック経済化を進めるなど、世界的な「反経済的国際主義」の流れがケインズに一定の影響を及ぼしたことは間違いない。

1933年7月、ケインズは同年の4月19日のダブリン大学での講演をもとにした論文「国家的自給（National Self-sufficiency）」を、The New Statesman and Nation 誌に、2回に分けて（8 and 15 July 1933）掲載するが、本稿ではこの論文の全訳を行うことにしたい（J. M. K, vol. XXI, pp. 233～46）。

国家的自給という大胆な論文タイトルゆえにケインズ研究者の注目を集めた本論文は、一部ではケインズの「保護主義派への転向宣言」と解され、あるいは逆に「ロンドン世界経済会議（1933年）の失敗に対する落胆と反動」の表われともみなされた。しかし本論文の一部を訳出して引用するのではなく、全部を邦訳して通読してみるならば、その衝撃的なタイトルと異なり、大筋においてそれまでのケインズの見解に沿っており、大きく逸脱しているものではないことがわかる。

そこで本論文を訳出する前に、注目すべき見解をまず列挙しておくことにしたい。

- (1) 大量生産型の工業製品に関していえば、生産費の差による自由貿易の利益は大きくない。また先進国の国民のニーズは、工業製品から住宅や個人サービス・地域的な楽しみなどの非貿易財へ比重を移す傾向がある。
- (2) 所有と経営の分離による株主の大衆化は、短期的な国際間の資本移動（たとえば「資本の逃避」）を引き起こし、国際的な不均衡と対立を生む。
- (3) 19世紀型の経済的国際主義は、世界平和の実現と維持に成功しなかった。
- (4) 各国で試行されている政治—経済的実験には、各国のそれぞれ政策の自由裁量が不可欠である。その場合国家的自給は、それ自体が目標なのではなく、最適な政策を実行するための環境の創造を意味しており、例えば貿易と資本移動の適切な規制のもとでのみ、十分な低金利政策が可能となる。
- (5) 公共資本の社会的有用性が私的な金銭収支計算をこえていることを政策当局は理解しておらず、それが英国の公共投資を抑制している。
- (6) ソ連やドイツなどが経済的國家主義と国家的自給を進めているが、そこには愚かさ・性急さそして不寛容と弾圧という3つの危険が生じている。

付記——なお本稿は、拙訳「ケインズの雑誌論文を読む(1)」(『立命館経済学』第55巻3号)の続編であり、内容的にも関連している。

I

私は、ほとんどの英国人と同様に、自由貿易は理性的で教養のある人間ならば疑ってはならない経済学上の教義であり、かつ道徳律であるとして尊敬すべきものと教え育てられてきた。また私は、自由貿易からの離脱は愚行であると同時に非道であるとみていたために、ほぼ100年の間維持され続けてきた英国の揺ぎない自由貿易の信念は、経済学において最高の正義であると考え、人々に説明してきた。実際私は1923年に次のように述べていたのである。「自由貿易は、2つの基本的な心理にもとづいているのであるが、これらの真理は適当な修正をほどこして表現される場合には、言葉の意味を正しく理解できる人なら、それに異議を唱えることはできないものであ

る (J. M. K. vol. xix, p. 147)』。

今日再びこの基本的な真理を読み返してみても、それらへの反論を見い出せないが、私の心が一部変化したのである。そして、この心の変化は他の多くの人々とも共有している。その背景にあるのは、経済理論の修正である。現在私が1923年に書いたように「最も粗雑な形の保護貿易論の誤りの犠牲者」としてボードウィン (S. Baldwin) 氏を非難することはできない。なぜなら彼は、既存の条件の下では関税はある程度失業を減らすと信じていたからである。しかし私が自らの見通しの変化させたのは、それとは別の旧世代とは異なる、世界中のこの世代と共有する希望・恐れそして先入観である。19世紀の思考習慣から抜け出すには大変時間がかかるのである。しかし今や20世紀も1/3が過ぎようとしており、われわれの多くも19世紀から脱しつつある。そして20世紀の中頃までには、われわれも各国の人々がそれぞれの先祖とは異っているように、19世紀的な思考様式や価値観とは違っているだろう。それゆえ、この心の変化の本質は何かを発見するために、分析と診断を試みることは有益である。

ほとんどが理想主義者で公正無私な人々であった19世紀の自由貿易論者は、自由貿易が何を成し遂げたかと考えていたのだろうか。

おそらくそう言うのが公平だと思うが、彼らはまず第1に、自分たちは賢明で、かつ自分たちだけが明晰であり、労働の理想的な国際分業に干渉する政策は、常に利益に反する結果になると信じていた。

第2に彼らは、世界全体で資源と能力を最大限生かすように配分することによって貧困の問題を解決してきたし、解決しつつあると信じていた。

さらに彼らは、自由貿易は経済的な最適性を実現するだけでなく、個人の創意の追求や才能開花の自由、発明そして特権や独占の力に抗する束縛されない精神の多様さなどを生み出してきたと信じていた。

最後に彼らは、自らが平和と国際協調と経済的正義の友であり保証人であり、進歩がもたらす利益を広げた人々でもあったと信じていた。

II

われわれは自由貿易にどのような欠点を見出すのだろうか。表面的にみるかぎり、何の欠点もない。しかしわれわれの多くは、実際の政策理論としてはそれに満足していない。何が誤りなのか。

平和の問題から始めよう。われわれは今日、強い信念をもった平和主義者であるから、もし経済的国際主義者がこの点で説得的ならば、彼らはわれわれの支持を得るだろう。しかし、経験と洞察によれば、これとは全く逆であると主張する方が容易である。なぜならば外国貿易の獲得に国家的な努力を集中していること、外国の資本家の資力と影響力によって一国の経済構造が支配されていること、そして外国の変化する経済政策によって自国の経済生活が大きく左右されることなどが、国際平和を守り保証しているとは思えないからである。一国の既存の海外権益の保護・新市場の獲得・経済帝国主義の進展などは、国際的な分業・特化の極大化と所有権がどこに

あるのかを問うことなく資本の地理的拡散の極大化をめざす機構のほとんど避けがたい特徴の一部である。

もし「資本の逃避」として知られている現象が止められるならば、賢明な国内政策を立案することは容易になる。資本の所有と経営責任の分離は、企業の株式会社化の結果として、所有が名もなき大衆の間に分散化され、彼らが知識と責任を欠いたままで今日買い明日売ようになるとき、事態は重大となる。しかし同じ原理が国際的に適用されるならば、非常時には耐え難いものとなる——私が所有するものに私は責任がなく、私が所有する企業を預かる経営者は私に対して責任がないのである。

一般に貯蓄された資金は地球上のどこに投資するのが最高の資本の限界効率あるいは利子収入を得ることができるかについて、金銭の収支計算がなされる。しかしそこでもし資本の所有とその運用者が遠く離れているならば、それは人間関係に災いをもたらし、長期的には金銭計算を無にしてしまうような緊張と敵意を醸成することを経験が示している。

それゆえ私は、国家間の経済的な紛糾を最大化する人々よりも、最小化する人々を支持する。思想・知識・芸術・歓待・旅行——これらはその性格上国際的であるべきである。しかし、財については合理的で便宜上可能ならば常に国内生産にしよう。そしてとりわけ、金融は何よりもまず国家的にしよう。しかし同時に、経済的な紛糾から脱却しようとするならば、決して急がず用心深くなければならない。それは根を絶つような問題ではなく、植物を好みの方向に向けゆっくり育てていくような問題でなければならない。

このような強い理由から私は、移行期が終わった後には、1914年に存在していた以上に国家的自給と国家間の非依存が進み、それは逆よりも平和の大義に役立つことになるという信念に傾いている。とにかく、経済的国際主義の時代は戦争を避けるという点では成功しなかった。そしてもし経済的国際主義者の友人が、その成功の不完全さゆえに公平な機会が与えられなかったからだとして反論するならば、将来より大きな成功がみられる見込みはほとんどないと指摘するのが妥当である。

そこでわれわれは、それぞれが自分の意見を持つために判定が難しい問題から、より純粋な経済学の問題に転じよう。19世紀、経済的国際主義者は正当にも、その政策は世界をより豊かにし、経済的進歩を促すこと、そしてもし政策を逆転させるならば、自らもそして隣国も貧しくなると主張したのである。それゆえ、このことは経済的利点と非経済的利点のバランスという容易には決められない問題を提起する。貧困は大悪である。経済的利点は真の利益であり、これが犠牲にされるべきではない。

私は19世紀には、経済的国際主義の利益がその不利益を凌駕するような2つの条件が存在していたと確信している。当時、大規模な移民が新大陸に向かうとき、彼らは旧大陸の技術の成果と資金を新大陸に持ち込んだ。英国の貯蓄は鉄道事業に投資され、鉄道は英国人の技術者によって建設され、その鉄道が英国人の移民を農地や牧場へと運んだのであり、節約し貯蓄した人々はそれに応じて収益が還元されたのである。そしてこれはその本質において、ドイツの大企業がシカゴの投機家によって、またリオデジャネイロ市の公共事業が英国の独身女性の貯蓄によってファイナンスされる今日の経済的国際主義とは似て非なるものである。第2に、各国の間で産業化や技術的訓練の機会の程度に大きな差異がある時には、国家間での高度な特化の利益は非常に大きい。

しかし私は今日、労働の国際分業の利益が以前と同じように大きいという主張には納得できない。合理的な世界において、かなりの程度の国際的な特化が必要なのは、風土・天然資源・国民性・文化の程度・人口密度などで広範な相違に支配されているような場合においてである。工業製品おそらく農産物においても、国家的自給の経済的コストが国内での生産と消費へと序々に進めていくことの利益よりも大きく上回っているという主張に私は疑い持ち始めている。近代的な大量生産のプロセスの大部分は、ほとんどの国や地域においてほぼ同じ効率で行えることを経験が証明しつつある。さらに富の増大とともに、住宅・個人サービス・地域での楽しみのような国際的な交易の対象とならないものに比べて、一次産品や工業製品は国民経済の中で相対的に小さい役割しか果たさなくなり、その結果、国家的自給の進展に伴うコストの適度な増加は大きな問題とならないのである。要するに国家的自給は、多少コストはかかるけれども、われわれがそれを望むならば、手に入れることができる贅沢品となっていくだろう。

III

国際的であるが退廃した個人主義的な資本主義は、しばしば戦争を経験したことからも成功したとはいえない。それは知的でも美しくもない。それは正しくなく有徳でもない。要するに、われわれはそれを嫌悪し軽蔑し始めている。しかし、その代りがあるのかを考えると、われわれは極度に困惑してしまうのである。

近年、世界ではさまざまな政治—経済的実験が始っており、異ったタイプの実験がそれぞれの国民性と歴史的環境に訴えている。世界は競争的な資本主義と法の強制力によって守られた不可侵の個人間の契約の自由を基礎に組織され、局面での違いはあるものの一般的には一つの型に収束していくと、19世紀の自由貿易論者は仮定していた。したがって19世紀における保護主義は効率性と自由貿易の図式の中での一つの汚点であるが、それは経済社会の基本的な性格に関する一般的な仮定を修正することにはならなかった。

しかし今日、各国は相次いでこれらの仮定を捨てている。ロシアは既に独自の実験を行っているが、古い仮定を捨てているのはロシアだけではない。イタリア・アイルランド・ドイツが新しい政治経済のモデルに注目している。そして間もなく、多くの国々が新しい経済の神を求めて追隨するだろう。英国や米国のような国でさえも、主要には古いモデルで一致しているものの、水面下では新しい経済計画を求めて努力している。結果がどうなるか分からないが、私はわれわれが多く失敗するだろうと予想している。実際、どの新しい体制が最善なのかを誰れも言うことはできない。

しかし、現在の私の議論のポイントはここにある。われわれにはそれぞれ自分の夢がある。われわれは既に救われたとは信じていないので、それぞれ自らの救済策を案出することに努力したい。それゆえわれわれは、自由放任の資本主義と呼ばれるような理想の原則に基づく同一の均衡を実現しようとする世界の力の意のままにされたくない。依然として古い考えに固執している人々はいるが、今日いかなる国においても、それを重大な力とみなしてはいない。少なくとも当面の間、そして現在の過渡的な実験的な局面が続くかぎり、われわれは自らが主人であり、外部

世界からの干渉から可能なかぎり自由であることを望む。

この視点から見ると、国家的自給という政策は、それ自体が目標なのではなく、他の理想が安全かつ適切に追求できる環境の創造を目指すものと考えらるべきである。

一つの例をあげよう。それは、この例が近年私の心のなかで、大きな比重を占めている考えと関連しているからである。私は中央からのコントロールを別にすれば、経済の細部については、可能なかぎり個人の判断そして事業心を守ることに賛成である。しかし私は次のように確信するに到った。すなわち、以前よりも相当に低い利率を実現しなければ、私企業の構造を守ることと、技術的進歩が可能にしている物的な豊かさとは両立できないということである。実際、私が望ましく描いている社会の変容は、次の30年間に、ゼロの近くまで低下した利率を必要としているかもしれない。しかし危険を考慮した後の利率が世界で同一水準になるように金融的な諸力が働く体制のもとでは、利率がゼロに近づくというは最も起りそうもないことである。ここではこれ以上論及できないが、複雑な理由により、貿易される財のみならず資本と貸付金の自由な移動を容認する経済的国際主義は、次の一世代の間に、別の体制下で達成されえたものよりもずっと低い物的な繁栄に陥ってしまうかもしれないのである。

しかしこれは単なる例示にすぎない。ポイントは、次の世代に19世紀のような世界的な均一の経済体制が形成される見込みはないということである。われわれが必要としているのは、将来の理想社会に向けての実験を有利に進めるために、そしてそれが過大な経済的コストを伴わずに成し遂げられる範囲内で、国家的自給と経済的分離を進めるために、できるかぎり外部での経済的变化に干渉されないようにすることである。

IV

われわれの心を、新しい方向に向わせているもう一つの説明がある。19世紀という長期間、人々は個人や団体の資金運用の望ましさの評価基準を、短期の金銭収支の結果に求めてきた。すなわち、生活の運営が会計士のある種の真似ごとになったのである。すばらしい都市の建設のために多くの資材や技術などの資源を用いる代りに、彼らはスラムを建設した。彼らがスラムの建設を正しく望ましいと考えたのは、個別事業の評価基準からみると、それが「ペイ」するからである。これに対してすばらしい都市の建設は、金融界の慣用語で言う「将来を抵当に入れる」ようなばかげた贅沢と考えられたのである。実際、どのようにして今日の偉大で栄光ある建設的事業が、誰れも見ることができない将来のわれわれを貧しくするのかわからないにもかかわらずである。

今日でさえわれわれは、もし失業者や遊休している機械が多くに必要な住宅の建設のために用いられるならば、間違いなく豊かになると国民を説得するのに——半分はむなしく半分は成功しているが——時間を使っている。なぜなら、この世代の人々の心は、前述した偽りの金銭収支計算によって依然として曇らされているので、その運用がペイするのかどうかという金銭勘定と違った結論を信用できないのである。われわれは貧しくなければならない。なぜならば豊かになることはペイしないからである。われわれは粗末な家に住まなければならない。それは立派な家を

建てられないからではなく、その余裕がないからである。

このような自滅的な金銭収支計算と同じ考え方は生活のあらゆる分野に及んでいる。われわれは田園の美しさを破壊するが、それは自然のすばらしさは何の用途もなければ経済的に無価値だからである。ロンドンは文明の歴史の中でも、最も豊かな都市の一つであるが、住民がなしうる最高水準を実現する余裕がない。なぜならそれはペイしないからである。もし今、私に力があるならば英国の主要都市を、実現可能な最高水準の芸術と文明の付属物で装飾することに着手するが、それはこのように使われたお金は失業手当よりも好ましいからだけではなく、それを不必要にすると信じるからである。大戦後に支出された失業手当をもってすれば、英国の各都市を人類の最高の作品にすることができたであろう。

また、もしわずかに安くパンを手に入れることができるならば、われわれは最近まで農村を荒廃させ、農業に付随する人類の伝統を破壊することがわれわれの道徳的な義務であると考えてきた。このMoloch（犠牲を要求する神）とMammon（富の神）に生け贄を捧げるのは、われわれの義務以外の何ものでもなかった。なぜならわれわれは、これらの神を崇拜することが貧困という悪に打ち勝ち、複利の力をもとに次の世代を経済的な平和に導くと心から信じていたからである。

今日われわれは幻滅を味わっている。それは以前よりも貧しくなったからではなく、それどころか少なくとも英国では、かつてない程の高い生活水準を享受している。したがってわれわれが幻滅を感じているのは、別の価値が犠牲にされた、それも全く不必要に犠牲にされたと感じているためである。なぜならば、実際われわれの経済体制の下では、技術進歩によって可能となる経済的富を最大限まで引き出すことができない、いや遠く及ばないからである。

しかし、われわれがいったん会計士的な利益計算から自由になるならば、われわれの文明は変化し始める。そしてわれわれはそれを、意識的に注意深く行わなければならないが、それは普通の金銭計算を保持するのが賢明な広範な分野があるからである。その基準を変更する必要があるのは、個人よりも国家である。捨てるべきなのは、大蔵大臣の株式会社の会長のような基準である。もし国家の機能と目的がこのように拡大されるならば、一般的に言って何を国内で生産し何を外国と交換するのかの決定は、政策の目的の中で最高順序に位置づけられなければならない。

V

国家の望ましい目的に関する考察から、私は現代の政治の世界に立ち戻る。今日、多くの国が国家的自給に向っている時に、その衝動を支えている思想を正しく理解し評価しようとするならば、われわれは19世紀に獲得した価値の多くをあまりにも安易に捨てつつあるではないのかを、注意深く考察しなければならない。国家的自給の主導者が権力を得た国々では、私の判断では例外なく、数多くの愚行が行われているように見える。

ムッソリーニは知恵の力を得つつある。しかしロシアは、行政の無能さと生活する上で価値のあるすべてを犠牲にしたことにおいて、これまで経験した、恐らく最悪の例を示している。ドイツは解き放された無責任のなすがままの状態である——ドイツの達成能力を判断するには早すぎるけれども。経済的なコストの圧縮を除くと、国家的自給にとって経済単位が小さすぎるアイル

ランド自由国も、実行されれば破滅しかねない計画を議論している。

その間、古いタイプの単純な保護主義を維持あるいは採用しているこれらの国々は、若干の目新しい計画を追加してはいるものの、理性では擁護できない多くのことを行っている。それゆえ、世界経済会議が関税の相互引き下げや地域的取り決めを用意できていたならば、それは心から賞賛すべきことだったのであろう。というのは、私が今日の政治的世界で経済的国家主義の名でなされていることのすべてを支持していると考えられたくないからであり、私の言いたいことは全く別である。しかし、私が指摘しようとしていることは、われわれが不安ながら向っている世界はわれわれの父たちの理想とした経済的国際主義とは全く異っており、そして現代の政治は以前の教義の格言にもとづいては評価できないということである。

私は経済的国家主義と国家的自給に向う動きのなかに3つのきわだった危険を見ている。

第1は愚かしさ——空論家の愚かさである。真夜中の大仰な話し振りから突然実行に移るような動きに、愚かしさを見出すことに何の不思議もない。最初われわれは、人々の同意を得るための言葉のレトリック（修辞）的な部分とメッセージの単調な内容を区別しない。移行期には真面目そのものである。言葉は当然ながら多少荒々しい。なぜなら、彼らは思想をもって無思想を攻撃しているからである。しかし権力と権威を手中にしたならば、型破りな面はなくすべきである。逆に雄弁家が嫌うことではあるが、われわれはコスト計算をしなければならない。実験的社会が安全に生き延びようとするならば、古い既存の社会よりも、はるかに効率的でなければならない。

第2の危険は性急さであり、それは愚かさよりも悪質である。ヴァレリー（Paul Valéry）の警句——「政治的な争いは、重要なことと急を要することの区別についての人々の意識を歪めかつ乱す」は引用に値する。社会の経済的移行は緩慢でなければならない。われわれは議論してきたのは、突然の革命ではなく、永続的なトレンドの方向である。われわれは今、その必要がないにもかかわらず狂ったように急ぐ、恐しいロシアの例を見ている。移行期の犠牲と損失は、もしスピードを強いられると膨大になり、とりわけこれは国家的自給と国内の計画経済を指向する移行期に当てはまる。なぜならば、経済の進歩は時間をかけて根づく性質があるからである。急激な移行は多くの富の破壊を伴うので、最初の段階では古い時代よりも経済は悪化しており、そのため壮大な実験の信用は失われるだろう。

第3の危険——3つの中で最悪なのが公平な批判に対する不寛容と弾圧である。新しい運動は通常、暴力や準暴力の局面をへて権力を手に入れる。そして彼らは反対派を説得するのではなく打倒してしまう。宣伝活動を利用し言論機関を手中にするのが近代的な方法であり、思想を時代遅れにし、人々の精神的な働きを麻痺させるために権力のすべての力を用いることは賢明かつ有益である。なぜなら、権力を奪取するためにはいかなる手段も必要であると知った人々にとって、建設という大義のために同じ危険な手段を用い続けることは非常に魅力的だからである。

再びロシアは、批判を拒絶することによる大失敗の実例をわれわれに提供している。戦争中に常に見られる無能さは、軍隊制度が高度に命令的であるために比較的批判を免がれることによって説明できるかもしれない。私は政治家を過度に賞賛するつもりはないが、彼らは批判の渦巻く中で育ってきたという意味で軍人たちよりもはるかに優秀である。革命は軍人に反対する政治家によって指揮される場合にのみ成功する。政治家に反対する軍人たちが指揮して成功した革命が

これまでにあったらどうか。

われわれが、まごつきながら向っている新しい経済様式は、その本質において実験である。われわれは予め正確に何を望んでいるのかについて明確な考えをもっていない。われわれは進みながら発見するであろうし、経験を重ねて形作っていかなければならないだろう。いまこのプロセスにとって、大胆で自由でかつ痛烈な批判が究極的な成功の必要条件である。われわれは、時代の輝く精神の共同作業を必要としている。スターリンは、すべての自由な批判的精神を、たとえ一般的に見て好意的であっても排除した。彼は精神の進行を退化させる環境を作り出して、脳の機能を停止させたのである。拡声器によって増幅された叫び声が人間の抑制された声にとって代った。宣伝の大声は野の鳥や獣たちさえも麻痺させている。スターリンの試みは、実験を行おうとする人々にとって恐ろしい例である。

とにかく私は、今日それぞれの適切な目的のために変えようとしている遺産を創出した古い19世紀の思想にやがて再び戻ることになるだろうと思っている。